

上野天神祭：鍛冶町

鍛冶町の「しるし」は三日月形の刃を持つ特大な長い武器であり、「月鉾」と呼ばれている。月の槍を意味する。「だんじり」はもともとこの武器のイメージから、かつては月鉾も呼ばれていたが、その後、「だんじり」のデザインが変更され、混乱を避けるために「だんじり」の名前は「二東」になった。

「二東だんじり」の花の屋根の上には、眼の形を表した眼象（げんしょう）という構造物が載っている。この眼象は、三日月紋で装飾され、「しるし」の月鉾と関連付けられている。上部の天幕には、桐の木に鳳凰と御殿鷹の図が描かれている。1886年までさかのぼる水引幕は、明治時代（1868～1912年）に日本美術界で人気のあった（元は中国の）テーマである「飲中八仙図」が刺繍されている。胴幕に中国の詩人陶淵明（365-427）の飲酒の詩が描かれている。

採菊東籬下 悠然見南山

胴幕には、籬の背後に菊畑、小枝で作られた小さな垣根が描かれている。前幕には伝統的な中国服を着た童と白象が刺繍され、見送幕には刺繍された龍虎が描かれている。

「二東だんじり」の見送幕は、明時代に（1368-1644）に中国で作られた。オリジナルは現在、だんじり会館に展示されている。祭りの期間中は、複製品が「だんじり」を飾っている。雲の中を飛翔する雲龍は、刻糸に孔雀の羽を混ぜて幕に刺繍され、眩しい乳白色の効果が生まれている。